

3 友達とかかわり合いながら自分達が創る自分達の生活（5歳児）

高本 洋 西多 由貴江

・ほし組事例

（1）A児の姿を通して

A児は、自分から進んで行動することが少ない幼児である。自分から人に話しかけることもほとんどない。したい遊びの時間は、一人で本を読んでいたりと、友達が遊んでいる様子を少し離れたところから眺めたりしていることが多い。普段やっていることや自分が経験したことには積極的に取り組む姿が見られるが、新しいことや友達とのかかわりには自信がなく、どうしていいか分からなくなってしまう傾向にある。

事例1 「……………」

7月11日（金）

誕生録音をしたときのことである。ほし組の6番目だったので内容は分かっていただろうし、特に困惑した様子もなかったので、普段どおりに始めた。

教師 「A児ちゃんにインタビューしたいと思います。
A児ちゃんの好きな遊びは何ですか？」

A児 「……………」

10秒ほど沈黙が続いた。

教師 「何が好きかな？」

A児 「……………」

教師 「かがやき隊のことでもいいよ」

A児 「……………」

教師 「A児ちゃん、かがやき隊ではどんなことをしてるの？」

A児 「カメそうじ……………」

教師 「カメそうじだって。うん、カメさんいつも気持ちよく泳いでるよね」

教師 「それでは次の質問、A児ちゃんの仲良しの友達は誰ですか？」

A児 「……………」

また、10秒程の沈黙が続いた。

教師 「特別仲良しはいないけど、みんなとお友達になりたいのかな」

A児 「うん・・・」

教師 「そうなんだ」

教師 「それでは最後の質問、A児ちゃんは、どんな人になりたいですか？」

A児 「ケーキ屋さん」

教師 「あっ、ケーキ屋さんなんだ。おいしいケーキを作ってくださいね」

以上のようなインタビューが展開された。最後の「ケーキ屋さん」だけは、はっきりとした口調で答えたが、あとの言葉は、自信のない、小さな声だった。

誕生録音でどんなインタビューをするかクラス全体で相談していたときには、それほど困った様子もなく、うれしそうに聞いていたし、前日に「明日はA児ちゃんの誕生録音だよ」と確認した時にも、うれしそうにうなずいていた。それなのに、事例のような展開になってしまった。

どう言えばいいのかわからない「A児の自信のなさ」を教師は感じたが、同時に、「A児の真面目さ」も読み取ることができる。いつも遊んでいないから好きな遊びを答えられないし、友達とかかわっていないのに仲良しの友達も答えられない。質問されたら、「・・・・・・・・」(答えられません)となるのは当然かもしれない。

しかし、だからといってこのまま指示待ち、誘い待ちでは、自分達で自分達の生活を創ることはできない。自分達の生活を創っていくためには、自発的な行動(したい遊びの充実)や友達とのかかわりが大切になってくる。まずはA児の興味・関心のあることを遊びに取り上げ、教師も一緒にかかわり、その中で友達とのかかわりのきっかけをつくっていききたい。

事例2-① 「ショートケーキ・・・」

7月14日(月)

朝のつどい後、みんなそれぞれにしたい遊びを始める中、A児はいつもどおり、特に何をして遊ぶというわけでもなく、保育室内で友達が遊ぶ様子を眺めていた。そのうちB児とC児が椅子で保育室内の一角に囲いをつくり、お店をつくり始めた。

教師 「ここ、何屋さんですか？」

B児 「何でも屋さんです。ここがアクセサリー屋さんで、ここが牛乳屋さん、そしてここには、チケットやさんをつくりまーす」

教師 「へえ、いろんなお店があるんだね」

そんな会話をしながら、A児が誕生録音で将来の夢を“ケーキ屋さん”と答えていたことを思い出した。

教師 「ねえ、A児ちゃん、ここ何でも屋さんだって。中にケーキ屋さんの場所つくってもらって、ケーキつくろっか」
A児 「……………うん (しばらく考えた後、小さな声でうなづく)」
教師 「ねえ、B児ちゃん、C児ちゃん、何でも屋さんにはケーキ屋さんもつくって」
B児 「いいよ」
教師 「よし、A児ちゃん、ケーキつくろう。何ケーキつくる？」
A児 「ショートケーキ……………」

製作コーナーにあった牛乳パックの切れ端で三角柱の側面をつくった。

教師 「ここからショートケーキつくれそう？」
A児 「うん」

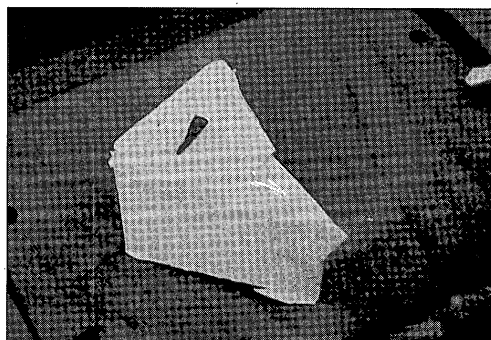
A児は張り切ってセロテープやはさみを持ってきて、ケーキをつくり始めた。そして白い三角柱ができた。

教師 「これで完成かな？」
A児 「イチゴがいる……………」

そう言うと、赤いマジックを取り出し、イチゴを描き始めた。描き終わると、はさみで切り取り、三角柱の上面に貼り付けた。

教師 「やった、ショートケーキの完成だ。
何でも屋さん、このケーキどこに
置けばいいですか？」

B児 「わあ、ショートケーキだ」
C児 「すごーい」



A児は少しうれしそうな表情をしていた。

事例2-② 「そうだ！星型のチョコつくろう」

7月16日 (水)

A児がケーキづくりをはじめて3日目。何でも屋さんも続いていたので、ショートケーキ、ぶどうケーキに続いて、今日も何か新しいケーキをつくりたいと考えていた。

教師 「A児ちゃん。今日もケーキづくりしようか」

A児 「うん」
教師 「今日はどんなケーキつくる？」
A児 「チョコレートケーキ・・・」
教師 「昨日の材料でつくれそう？」
A児 「茶色の紙じゃないからつukれない・・・」
教師 「色塗ればいいんじゃない」
A児 「うん・・・」
教師 「よし、じゃあ材料はまたこれ使おうか。形どうする？」
A児 「丸くする」
教師 「こんな形でいい？」
A児 「うん」

短冊形の画用紙を丸めて円柱状にすると、イメージが膨らんできたのか、セロテープを取りにいったり、マジックを用意したりと、動き始めた。そこへ、D児がやってきた。

D児 「何つくっているの？」
教師 「チョコレートケーキだよ。何でも屋さんのケーキコーナーに置くんだよ、A児ちゃん」
A児 「うん」
D児 「ふーん。でも、そのケーキ、上に穴開いてるよ」
教師 「今つくっている途中だから、今からそこもつくるの」
D児 「わたし、丸いののつくり方知ってる。えんぴつとって」

と言うと、A児がえんぴつを持ってきた。

D児 「これをこう置いて、周りをえんぴつで・・・あれっ」
A児 「しっかり押さえなくちゃ」
D児 「うん、わかってる」

いつの間にかケーキづくりの主導権をD児がとり始めた。A児はその後、はさみを持ってきたり、一緒にセロテープを貼り付けたりはしていたが、結局茶色マジックでの色塗りもD児がすることになった。A児は、D児が色を塗る様子をじっと見ていた。

D児 「このケーキ塗るの難しいなあ」
A児 「だって丸いもん。こっちの方塗ってないよ」
D児 「わかってるって！」

そんな会話をしながら、半分くらい塗り終えたときのことだった。

A児 「そうだ！星型のチョコつくろう」

そう言うと、茶色のマジックを持ってきて、画用紙に星を描き始めた。星を描き終わると、

A児 「棒のチョコもつくろう」

と言いながら、棒を描き、はさみで星と棒を切り取った。D児が色を塗り終わると、A児はケーキの上に星と棒を貼り付けた。

教師 「星と棒のチョコレートが上に乗ったよ」

D児 「ほんとだ。チョコレートケーキ完成です」

C児 「でかい」

B児 「おいしそう」

A児は満足げな表情をしていた。

遊びの時間は友達の遊ぶ様子を眺めているだけだったA児がケーキづくりをきっかけに遊びに参加するようになってきた。その理由として、①A児にとってケーキづくりが興味・関心があるものであったこと、②「ケーキ屋さん」という遊びが魅力をもっていること、③教師がその場において援助したこと、が挙げられる。

事例1の誕生録音では、質問に答えないA児の姿が中心であったが、将来の夢の質問に対する「ケーキ屋さん」という言葉だけははっきりとした口調だった。そこで、教師はそこに目をつけ、A児にケーキづくりを提案した。ちょうどお店屋さんごっこが保育室内で展開されていたことがきっかけとなったが、教師がそのタイミングを逃さずA児に投げかけ、教師も一緒にケーキづくりをしたことがA児を動かすこととなった。また、提供した素材やアイデアもよかった。ケーキが本物に近い形だったため、A児にとってはイメージをもちやすかったし、友達ともイメージを共有することができた。その結果、興味を示したD児がケーキづくりに参加し、A児とのかかわりをもつことができた。

この後、近くにいたE児、F児が何でも屋さんに加わったり、G児が「お客さんになりたい」とやってきたり、I児が加わってタフロープで三つ編みのアクセサリーを丁寧につくったりと、メンバーや内容に広がりが出てきた。このように、「ケーキ屋さん」をはじめとする「お店屋さん」ごっこは、みんなでイメージを共有できる遊びであり、お客さん役が出てくることで、かかわりの広がりも期待できる遊びといえるだろう。

前週の土曜日に表現会が終わり、月曜日から久しぶりにしたい遊びの時間が確保された。ほし組の保育室では月曜日から、F児、E児、G児、A児ら女児を中心に、お店屋さんごっこが展開されていた。この日も、朝からE児、G児らがいすを並べてカウンターをつくり、タフロープや厚紙でつくったアクセサリーを並べていた。あとからF児、A児らも自分でつくったアクセサリーを持って集まってきた。F児はA児がつくってきたものが気に入ったようで、近くにいた教師にうれしそうに話しかけてきた。

F児 「先生見て、これA児ちゃんがつくったんだよ」

教師 「へえ、そうなんだ。お人形？」

F児 「バレリーナだよ。ねえ、A児ちゃん」

A児 「うん」

A児はうれしそうにうなずいた。

F児 「ティッシュでつくったんだって。すごいね」

教師 「へえ、ティッシュだけでこんなにつくれるんだ」

A児 「水をつけて固めたの」

A児は得意げに話した。

A児 「これ、どうしようよ」

F児 「お店に並べようよ」

A児 「うん、そうだね」

2人は話しながらお店屋さんの準備をした。

しばらくして、お客さんがやってきた。

G児 「いらっしゃいませ。これは新作の700万円の指輪です」

A児 「700万円！？高すぎるう」

そんな会話をしながら、お店屋さんは続いた。

○友達とかかわり合うA児の姿

これまでのA児は、みんなが遊んでいる様子を傍から見ているだけのことが多かった。見ながら、楽しそうな時には笑ったり、思ったことを教師に話しに来たり、教師に誘われて一緒に遊びに入ったりといったかかわりをしてきた。しかし、今回の遊びでは、自分から進んで遊びにかかわっていた。自分でアクセサリーをどんどんつくり、お店に並べていた。その中で、友

達と相談したり、お客さんに説明したりする姿も見られた。そして今回の事例では、自分のつくったものが友達に認められたことで、自信をもって話をしたり、進んで遊びを進めるA児の姿を目にすることができた。これまでに、いろいろな友達とかかわり合いながら活動することを通して、安心して自分を出せる友達関係ができてきたのだと感じた。

○5歳児3学期のお店屋さんごっこ

お店屋さんごっこは年間を通じてよく見られた遊びである。2学期には、いろいろな素材を利用し、アクセサリや食べ物等、工夫してより本物に近いものをつくっていた。しかし、今回のお店屋さんの品物は簡単なものばかりであった。ただ、友達とイメージを共有して遊ぶことができた。つくることよりも、友達とのかかわり合いを楽しんだり、言葉の掛け合いを楽しんだりするお店屋さんごっこだった。友達同士の関係がしっかりできてきて、お互いが他者を受け入れられるこの時期だからこそできた遊びだったのかもしれない。また表現会の劇で、一緒にお話をつくったり、衣装づくりをしたりといった友達と一緒に一つのものをつくり上げる経験を積んできたことも影響しているといえるだろう。

(2) H児の姿を通して

一学期の牛乳タイムで、全体の場に間に合わない男児が2人いた。K児とH児である。2人とも、着替えへのとりかかりが遅く、「いただきます」のあいさつをしようとする時に、まだ着替えていたり、運動着のままだったりすることが多く、遊んでいることもあった。また、牛乳タイムや着替えに限らず、全員で何かをしようとするときに、遅れをとることが多かった。そこで、教師が声をかけたり、手伝ったりしながら一学期を過ごしてきた。

2学期に入り、K児が自分なりに、遅れないようにがんばるようになってきた。その結果、のびのびフェスティバルの練習では、遅れて迷惑をかけることはほとんどなかった。そんな中、一学期と変わらないH児が目につくようになった。

事例4 「……」

9月3日(水)

9月になっても天気がよく、気温の高い日が続いた。遊びの時間はプールに行くことが多かった。この日も、ほとんどの幼児がプール遊びを楽しんだ。そんな中、H児は「虫とりをしたい」と主張し、運動着で虫とりをしていた。

プールからみんなが帰ってきて、テラスで着替え始めた。運動着で遊んでいた幼児らも、かたづけと着替えを始めた。虫とりから帰ってきたH児が足洗い場で足を洗っていたが、いつになっても終わらない。暑い日だったので、仕方ないかなという思いもちつつ、

教師 「水、無駄づかいしないでね」

と声をかけ、中に入った。しばらくしてテラスに出ると、H児は水をそこらじゅうにまき散らし、足洗い場周辺は水浸しになっていた。

教師 「ちょっと、水出しすぎ！」

H児 「……」

聞こえていないのか、自分のことだと分かっていないのか、水遊びを続けるH児。

教師 「H児くん、そこ水浸しだよ。出しすぎて地面に穴が開いてるよ」

H児 「……」(顔を上げて反応はしたが、なんとなく上の空)

それでもやめる様子がないので、目の前まで行き、

教師 「水がもったいない。それに出しすぎると砂が詰まることもあるんやよ」

H児 「うん」

とうなずきながらも、水を止めようとはしないので、教師が水を止めて、

教師 「H児くん。どうするのこれ？わかってる？」

H児 「……うん」(うなずく)

教師 「注意されてたって思わなかった？」

H児 「……」(ポーっとしている)

教師 「ここは水遊びの場所じゃありません。それに、遊びの時間も終わってる。

もうみんな牛乳の準備しているよ。牛乳隊の仕事もあるよ」

H児は“牛乳隊”という言葉でようやくハッとして、中に入っていった。

H児はこちらからの問いかけに対してうわの空で、話をしても伝わっているのか不安になることが多い。相手の目をじっと見ることも苦手である。

この日も、水を出して遊んでいたことに対し、いくつかの言葉をかけたが、結局自分で止めることはなかった。「水が冷たくて気持ちいい」という気持ちは分かるが、「本当は止めなければいけないんだけど……」という気持ちをもっていたかどうかは疑問である。教師の言葉かけにも問題があったかもしれない。自分としては、「止めなさい」という言葉を直接言わずに、H児に「止めなくちゃ」ということに気づいてほしかった。年長だから分かるはず、という思

いもあった。しかし、H児には届かなかった。

この事例で教師は、H児の気持ちを大切にしながら諭しているが、H児の場合「だめ、今はこの時間じゃないよ」と言ってすぐに教師が水を止めてもよかったのではないだろうか。「個に応じた対応」というのは「その個の気持ちを大切にしながら諭す」ことだけではなく、「その個に応じた声かけ、指導」ということになる。H児は、決してできないわけではない。活動と活動の切り替えに時間がかかるのである。だからこそ、一つ一つの状況をH児に知らせてやり、段階を追って教えてあげることが必要になってくる。H児の場合、そのように教師が体を通して教えてあげることが効果的だと考える。

事例5 「おれたちおにごっこしとるもん」

11月6日(木)

前週からどんぐりを使ったコマやアクセサリーづくりが始まっていた。前日にどんぐりゴマをつくっていたJ児が、どんぐりを使った動物づくりの本を見つけ、つくってみたいと話をしていたので、道具と材料を用意しておいた。

しかし、この日J児は朝からH児と一緒に廊下やテラス付近をウロウロしていた。しばらく様子を見てみると、プレイルームからテラスに出てほし組に入っていくというコースを何度も回っていたので、声をかけた。

教師 「ねえ、J児くん。昨日話してた動物の材料用意したんだけど、つくる？」

J児 「えっ?・・・」

J児は返事をしながらも、ちょっと困ったような表情を見せ、H児と顔を見合わせた。

教師 「H児くんもつくってみる？」

H児 「やらんよ。だっておれたちおにごっこしとるもん」

H児はそう言うのと走って行った。

J児も教師に向かってニコッと微笑むと、H児を追いかけ、走って行った。

しばらくしてから、つきL児、M児、N児らと一緒に楽しそうに走り回っているJ児、H児の姿を目にした。

○目的をもって友達と一緒に遊ぶH児の姿

この事例で教師がJ児とH児に声をかけた理由は二つある。一つはJ児が前日話していたことを忘れていないかと思い、思い出してもらうため。もう一つは、傍から見るとただウロウロしているようにしか見えなかった2人に、目的をもって遊んでもらいたい(どんぐり工作に取り組んでもらいたい)という思いをもったからである。しかし、この事例で「目的もたずに・・・」というのは結局教師の勝手な見取りであって、実はH児もJ児も目的をもつ

て遊んでいたことがわかった。

事例4で見られた、状況を感じ取れずにボーっとしているH児の姿から考えると、友達と一緒に目的をもって遊びこむH児の姿は成長した姿として捉えることができる。その成長の過程には、友達の存在が大きく影響している。一学期は、何となく一緒に虫とりをしている仲間という存在だった友達が、一緒にいて安心できる存在になってきた。自分の思いを素直に伝え合えるような関係ができたことで、友達同士で相談しながら、自分達で遊びを進めていけるようになってきた。

また、教師の問いかけに対し、何を言われたのかを理解し、自分の思いをしっかりと伝えたことにもH児の成長が伺える。友達と向き合う機会が増えたことで、教師をはじめとするいろいろな人たちと向き合っ話ができるようになってきたと考える。

実はこの時期、H児は進学先のことを家族で相談したことがあった。家からバスを乗り継ぐと1時間以上かかる道のりを自分は通う自信がない、家に帰ってから近所に遊ぶ友達がいない、ということをも自分なりに悩み、考え、家族で話し合いをした。この結果、校区の小学校に行くことに決めたのであった。この経験も、H児にとってはプラスになったようである。

事例6 「・・・・」

3月10日（水）

終了式の日のことである。式も終わり、担任との最後のお別れの場で、H児とK児が呼ばれた。

I教師 「みなさん、4月からほとんどの人は附属小学校へ行きますね。でも、実は別の小学校に行くお友達がいるんです。K児くん、H児くん、前にいらっしゃい」

場がざわついた。

I教師 「2人は今日ここでみんなとお別れになります。だからあいさつしておきましょうね」

K児が恥ずかしそうに前に出てきた。しかし、H児は自分の場所から動けずにいた。よく見ると目に涙をためてこらえていた。

I教師 「あらH児くん、どうしたの？
お別れが悲しくて涙が出ちゃったかしら」

みんなの視線がH児に集まった。その瞬間、H児の目から涙がこぼれ落ちた。流れる涙を拭きながら歩こうとするH児を担任が後ろから支え、みんなの前まで歩いた。

I教師 「K児くんはJ小学校、H児くんはN小学校へ行きます。2人ともうちの近くの学校に行くんですね」

K児 「うん」

H児 「……………」(コクッとうなずく)

I教師 「H児くんはお友達とお別れするのが悲しいのかな」

H児 「……………」(力強くうなずく)

I教師 「それは素敵なことです。H児ちゃんはお友達を大切にしてきたのね。これからもその気持ちを忘れずにね」

H児 「……………」

友達も教師も保護者も、思わずもらい涙をしてしまった出来事であった。

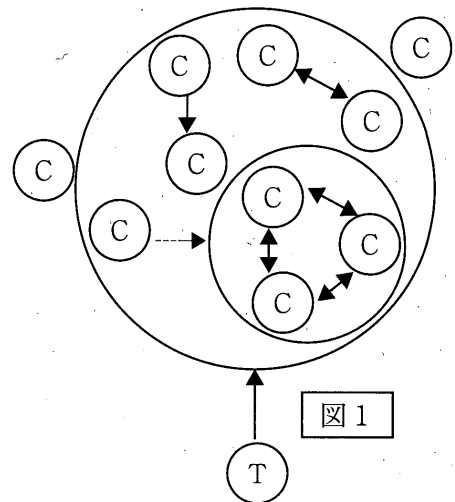
みんなと違う小学校へ行く寂しさ、友達と別れる辛さなど、いろいろな思いがこみ上げてきたのだろう。幼稚園生活において、友達と一緒に遊ぶことを思う存分楽しんできたこと、友達を大切にしてきたことが伺えた。

～一年を振り返って～

○集団を意識しながら個を支える

一学期は学年スローガンの「自分達が創る自分達の生活」を意識して、集団に対する指導や援助、評価を中心に子ども達とかがわってきた(右図1)。クラスや学年単位で集まり、話し合ったり、行事の準備・進行をしたりすることを意図的に取り入れてきた。しかし、その中で、集団の中で状況を感じ取れないH児(事例4)や、まだまだ自己表出に不安をもっているA児(事例1)らの姿を見、5歳児であっても、個に対する援助がまだまだ必要なのではないかと考えた。

そこで、不安を抱えている個やまだまだ教師の手が必要と思われる個に、じっくりとかがわることにした(図2)。事例2は、自分から進んでかかわりをもとうとしないA児が、興味のあるケーキづくりをきっかけに、教師や友達の前で自分の思いを出すことで、友達とのかかわりをもつことができた事例である。教師が個を見取り、個を活かし、個を支える援助をしてきたことが、A児の自己表出や友達とのかかわりにつながったといえよう。



このような経験を積み重ねていくと、次第に幼児は友達と一緒に自分達で生活を進められるようになってくる。とはいえ、まだまだ個に対する援助が必要である。なぜなら、一人一人の育ちに目を向けるとバラバラだからである。この時、教師には個を支えながら全体を支え方向づける援助が求められる。(図2)それは例えば、幼児らが一つの目的に向かっていく時に、一緒にがんばろうという気持ちになったり、力を合わせようとしたり、みんなでやって楽しかったねと思えたりするように環境を構成したり、かかわり方を工夫するということである。そのような教師の援助のもと、幼児らが充実感、満足感をみんなで味わうことができることがクラス集団として生活する意義の一つではないかと考える。

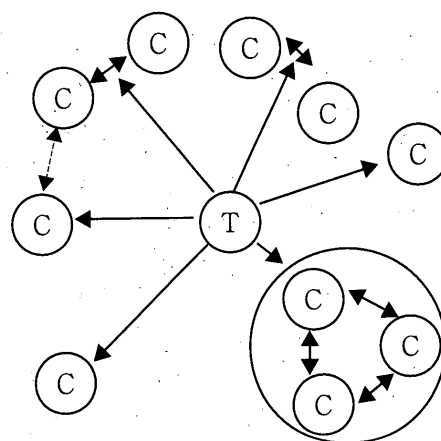


図2

○友達と一緒に自分づくりをする

友達とのかかわりが心の安定につながり、友達に認められたことが自信となり、その後の目的をもって自分から進んで行動する姿につながっている。事例3は、A児が自分から進んで遊びに参加し、友達とかわった事例である。ここでも友達に認められたことで自信をつけたことが話し方や態度から伺える。

また、事例5は、H児が友達と一緒に目的をもって遊び込んでいる事例である。友達との絆が強くなったことで、安心して生活するようになってきたH児の育ちが読み取れる。特にH児の場合、自発的な遊びの時間に自分で築いてきた友達関係だったためにより強い絆ができていた。その証拠が事例6の、修了式で友達と別れるのが辛くて涙を浮かべるH児の姿に表れている。

園生活を送っていく上で、友達の存在の大きさ、大切さを改めて感じた。また、自分づくりをしたり、自分達で自分達の生活を創りあげたりしていく中で、友達とのかかわり合いが不可欠であることを実感した。

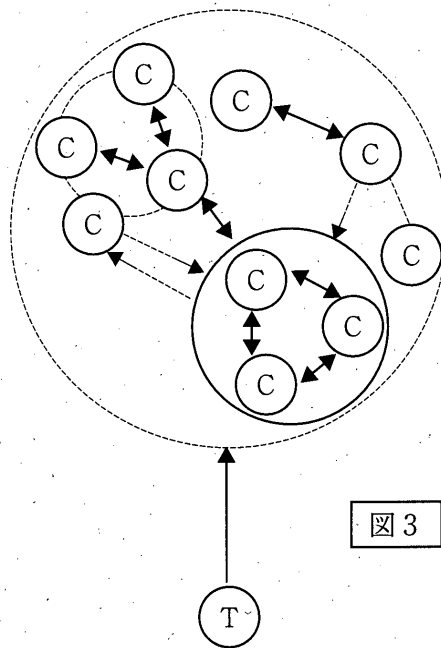


図3

・つき組事例 ～S児の姿を通して～

今年度、持ち上がりで年長児クラス（つき組）の担任になった。S児は4歳児の時、隣のクラスにいた。昨年度もクラスの枠をはずし、セレクトグループで活動することが何度もあり、S児と一緒に活動することも多かった。そのため、これまでも自分なりにS児のことを理解しかかかってきた。しかし、つき組の一人としてS児と出会ったとき、担任として考えさせられることがたくさんあった。

S児は自分がほしいと思ったものは様々な方法で自分のものにしようとする。やりたくないことに会った時、初めからかかわろうとしなかったり、そばでやっている友達の邪魔をしようとしたりする。その時、大きな声で友達を威嚇したり、たたいたりする為、毎日のようにトラブルが繰り返されていた。その時その時は教師や友達の話を聞き納得する様子を見せるが、次の瞬間また、同じトラブルを繰り返していた。担任として、S児とどのようにかかわっていけば良いのかわからず悩む日々が続いていた。

事例1-1 「・・・」

9月18日（木）

弁当の時間のことである。保育室の中の自分の好きな場所で友達と一緒に弁当を食べることになった。

弁当を食べはじめ、しばらくすると

S児 「先生、家からもってきた」

と、自分の弁当箱の中に入っているゆで卵をニコニコな笑顔で教師に見せた。

教師 「おいしそうだね」

S児はニコニコしながら教師の顔を見ていた。その時、隣にいたH児の顔がおかしいことに気づいた。H児の弁当箱を見るとゆで卵の黄身が少し残っている。

教師 「H児君もゆで卵もってきたの？」

H児 「・・・」

S児は二人の様子を笑顔をつくりながら見ている。

P児 「H児のや。S児がとってん」

と、H児の隣に座っていたP児が教師に話してくれた。

教師 「H児君の卵なの？」

H児 「……………」

S児は前より笑顔をつくり、教師の顔を見ている。

P児 「そうや。S児がとって入れた」

教師 「H児君、そうなの？」



H児は頷いた。S児は相変わらずニコニコしながら教師やH児の顔を見ていた。

教師 「S児君、この卵はH児君が家からもってきた卵なの？」

S児は、つくり笑顔のまま何度か頷く。

教師 「S児君、友達の弁当を取ったらだめ。これはH児君のお母さんがH児君のためにつくったお弁当なの。ちゃんと返さないだめ」

S児はゆで卵をH児に返した。

教師 「P児君、本当のこと教えてくれてありがとう。S児ちゃんがいけないことをしていたらちゃんと教えてあげてね」

P児 「うん」

H児は何も言えないままに終わった。

事例1-2 「勝手に入らんといて」

10月2日(木)

プレイルームでC児、D児、H児、B児、Y児、W児らが大きなダンボールや大型積み木を使い、お化け屋敷をつくって楽しんでいた。そこに、外でサッカーをしていたS児がやってきた。

S児は大きな声で怒鳴りながら中に入ってきた。「何しとるが」といい終わらないうちに、ダンボールの中に入っていった。お化け屋敷をつくっていた幼児らは教師の顔をチラッと見た。

Y児ら 「勝手に入らんといて」

W児ら 「まだ出来とらんげんて」

と、お化け屋敷をつくっていた幼児らに言われたにもかかわらずS児は「入れてや」と、大きな声で怒鳴りながら、ダンボールの中に入って行った。その様子を見ていた幼児らは「もう」と困った表情で顔を見合わせている。

C児 「何で勝手に入るが。もう、壊れる」
教師 「S児ちゃん、お化け屋敷つくっていた友達がまだできてないから入らない
でって言ってるよ」
S児 「何で一。いいがね」(威嚇するように大きな声で叫ぶ)
教師 「そんなに大きな声で言ったら、友達が怖いって思う。もっと優しい声で」
S児 「入れて。ね、ね、いいやろ」(笑顔をつくり、ささやくように話す)

そこに、Q児がダンボールでできたバットを持って遊戯室に来た。S児は「それなんや？」と、Q児についていってしまった。お化け屋敷をしていた幼児らは顔を見合わせて首をかしげた。

教師 「行ってしまったね。でも、Y児ちゃんもW児君もC児君も自分の思っていること、しっかりお話できてすごいいって思ったよ」

3人は顔を見合わせてニコッと笑い、また続きを始めた。

○S児と周りの幼児とのかかわり

多くの幼児はS児が乱暴ですぐにものをもっていく、すぐたたく、怖い、というような良くない思いをもってきている。2学期に入り、すぐに手が出たり、怒鳴ったり、大きな声を出したりするようになってきた。そのため、事例1-1のH児のように何もいえない幼児らの姿も見られるようになってきた。

教師としてS児の言動を注意していくことも大切だと思ったが、S児とかかわる友達の姿を大切にしていかなければいけないと考えた。一人でも多くの幼児がS児に自分の気持ちや思いを話したり、S児のいけない言動を注意したりできるような雰囲気をつくっていきたいと思いかかわっていくことにした。

Y児、W児はこれまで、S児にたたかれたり、噛まれたり、自分のつくったものや捕まえたものをとられたりされたことがあった。その度に泣いて何も言えなかったり、教師に助けを求めに来たりした。S児は二人のことが好きで、友達になりたいと思っているが、その方法が乱暴で受け入れられないでいる。二人には「いやだ」「やめて」と言えるようにかかわってきた。S児には友達が「いやだ」「やめて」って言ったときにはすぐに止めなければいけないことを伝えてきた。事例1-2では、数人の幼児が同じ思いをもってお化け屋敷をつくっていたこと、教師も仲間であったこと、S児の姿を教師もずっと見ていたこともあり、自分の思いを言えたのだと思う。

すぐにかかわりが変化するわけではないが、教師がそばにすることで、一人でも多くの幼児がいやだと思ったことを伝えられたり、一回でも多くS児のよくない言動を本人に伝えたりできるように今後もかかわっていきたいと考えている。

わくわくランド(4、5歳児合同で行う活動)に向けて、5歳児で話し合いを進めてきた。この日はグループごとに4歳児に自分達の店を紹介するための言葉を考えたり、看板をかいたりしていた。その中の『なんでもとり』グループの様子である。

S児、R児が看板をかいている。H児は二人の様子を楽しげに見ている。K児、O児、E児、B児らはその様子を困った様子で見ている。

S児 「ここにもかくか？」

R児 「おう、ここにもかこうぜ」

と、二人でどンドンかき進めていく。そのうちかくことが楽しくなり、お店とは関係ないものをかきはじめた。

K児 「そんな変なものないし。魚に見えんやろ」

S児 「いいがいや」(大声で叫ぶ)

K児 「・・・」(おこった表情を見せるが、何も言えなくなり、O児の顔を見て、ぶつぶつ言っていた)

教師 「R児君、S児君。K児君が変だよって言ったよ。グループみんなで相談してかくんだよ」

二人は顔を見合わせて、ニヤッと笑った。そして二人は「できた」と言って、看板をもって行ってしまった。

教師 「看板できたの？」(その場に残っていた幼児に聞いてみた)

周りの幼児は「まだできてない」「なんか変やもん」と答えた。

B児 「二人で勝手にかいたんや」

E児 「お化けとか、変なものとかかいてあるし」

教師 「そうか。うまくみんなで相談できなかったんだね」

K児 「そうや。だってS児おるしや」

教師 「S児君は一生懸命かこうとしていたんだよ。ちょっとふざけてしまったけどね。じゃあ、すてきな看板にするときにはどうしたらいいかな？」

U児 「魚とか、スーパーボールとか、わかるように書かないとダメや」

E児 「みんなでかいたらいい」

B児 「かくところ決めてかけばいい」

など様々な意見が出された。そこで、R児、S児を含めグループみんなて話を再開することにした。

教師も加わりグループの幼児らのこれまでの話し合いの様子や思いをR児、S児に伝え、これからどうしていくか話し合うことにした。最初のうちは「これでいいの」と、周りの友達のことを聞こうとはしなかった。しかし、周りの幼児が自分の思いを話していくうちに、R児とS児は顔を見合わせ「じゃあ、かき直そう」と声をあげた。グループみんなでもう一度看板を書き直すことになった。

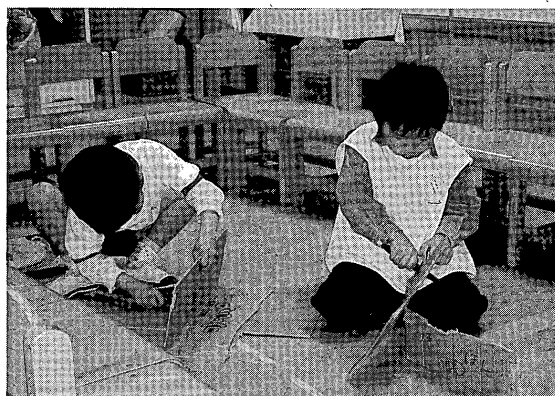
○S児と周りの幼児

S児の乱暴な行為は少しずつ少なくなってきたが、まだ周りの幼児らは怖いという思いをもっているため、自分の思いを直接言えないことが多い。しかし、S児が変わってきていることを感じている幼児も出てきた。また、S児のよいところを見ようとする幼児の姿も見られるようになってきた。

その中で「だって、S児がおるしや」というK児の言葉を聞いて愕然としてしまった。自分達のグループがうまくいかないこと、自分の思いが通らないことをS児一人の責任にしているのである。S児自身も自分がやりたいという思いをもっている為、周りの友達のことを受け入れようとしない。しかし、それはS児に限ったことではなく、R児も同じことをしているのに、K児の中ではS児だけが悪者になっている。この思いはこの日のかかわりの中で生まれたものではなく、これまでの生活の中で積み重なってきた思いである。その思いを変化させていくためにも、教師はS児の言動を公正に判断し、幼児らに伝えていかなければならない。その積み重ねによって幼児ら自身が公平に友達の姿を見ることができるようになっていくと考える。

○S児とR児

これまでのS児は自分の思いを押し通そうとする為、周りの友達のことをなかなか受け入れることができなかった。しかし、この事例の中でしぶしぶながらも自分から友達のことを受け入れ、一つの目的に向かって一緒に活動することができた。それは、一緒にぶざげたり、おちやけたりする仲間であり、S児のよき理解者であるR児と一緒にいたことが大きな要因になっていたと考えられる。S児の育ちを考えるうえで、R児の存在は大きい。二人はいつも一緒にいるわけではない。お互い興味関心が異なる時には全く違うことに取り組む二人である。しかし、お互いを意識しながら生活している。特にS児にとってR児はいざという時、頼りになる存在である。S児にとってR児の力を借りながらも①周りの友達のことを受け入れる。②みんなと一緒に一つの目的に向かって活動する。このような経験を積み重ねていくことが大切だと考える。



事例3 「ゆるさない。だって、いつもたたくし。またするかもしれないもん」 12月11日（木）

したい遊びをしている時、製作コーナーでS児がA児の使っていた材料を取ったことが原因でトラブルが起きた。

S児がA児をたたいたため、A児は泣きながら話し始めた。

A児 「どうして勝手に取っていくの？」

S児 「だって、おいてあったやろ」

A児 「おいてあるからって勝手に取っていったらだめだよ。それに、前に、もうたたかないって約束したのに、何でたたくの？」

S児は何も言わずにその場を離れようとしたので、教師が中に入ることにした。

教師 「S児ちゃんがA児ちゃんをたたいてしまったん」

A児 「そうや。(とっていったら) だめって言ったら押ししたり、たたいたりしたの」

教師 「S児ちゃんやってしまったん」

S児 「・・・」何も言わずに頷いた。

教師 「我慢できなくなった？ いっぱい我慢できるようになってきたのにね。今日はダメだった」

S児 「それ（A児の使っていた紙）とってしまった・・・たたいた」

教師 「そうか」

そこにR児が心配して近づいてきた。

R児 「どうしたん」

S児とA児が答えなかったので、教師がこれまでの様子を伝えた。

R児 「S児、(たたく真似をしながら) やったんか」

S児 「うん」

R児 「それはやりすぎやな。あやまれ」

S児 「ごめん」(少し考えてから小さな声で謝った)

A児 「ゆるさない。だって、いつもたたくし。また、するかもしれないもん」

S児 「もうやらないから」

A児 「前も、もうしないって言ったのに、すぐにたたくもん」

教師 「そうやね。すぐたたいてちゃうもんね。でも、前より、我慢してると思わない？ 前はすぐたたいていたけど、今はたたきたくなくてもぐっと我慢して、5回やりそうになっても3回我慢できるようになってきたんだよ。そう思わない？」

R児	「そうやな」
A児	「……。でも、またたたかれたら嫌だもん」
S児	「もう、たたかないから。がまんする」
教師	「A児ちゃん、先生と一緒にS児のこと応援してあげよう。また、たたいてしまうかもしれないけど、我慢できるようになるまで、やりそうになったら教えてあげよう」
A児	「わかった。S児ちゃんもうたたかないでね」
S児	「わかった」

○S児と女児とのかかわり

この事例の翌日、登園してすぐにS児はA児をたたいてしまった。周りでその様子を見ていたM児ら数人の女児が驚いた様子で教師に報告にきた。しかし、教師の予想とは違うものだった。

「S児ちゃんがA児ちゃん押したの。でもS児ちゃん「押してしまった」って自分で気付いたよ。それで「ごめん」って謝ったよ。A児ちゃんも怒ってないって。良かったね」というものだった。

これまで女児の多くはS児のことを恐れ、かかわり合うことをさけていた。しかし、この事例でA児が自分の思いをぶつけ、話し合うことができたことは大きな出来事であった。では、なぜA児は自分の思いを伝えることができたのか考えてみる。

①S児の育ち

S児はこの事例の中で教師やR児に支えられながらも、自分の姿を振り返り、自分でやってしまったことを認め、素直に反省し、言葉を発している。S児はこれまでの生活の中で「友達と仲良くしたい」という思いをもち、そのためにはどのようにかかわっていけばいいのか、クラスの中で生活する時、自分はどのように行動したらいいのかを自分なりに考え、努力しながら生活してきた。このような生活の積み重ねの中で、S児はA児ら女児の気持ちを考え、理解し、行動しようとしたからこそ、A児の言葉を受け入れることができるようになったと考える。また、教師やR児以外の友達の言葉を受け入れることができるようになったのはS児の育ちを考える中で、とても大きな変化だと感じた。

②集団の育ち

事例の翌日のM児ら女児の言葉には驚かされた。A児のことを心配しながらもS児の姿を客観的に捉えA児にもS児にも公平な目でかかわっていた。教師にとってこのかかわりはとても嬉しいものだった。

これまで、S児をただ怖いと思っていた幼児らが毎日の生活の中でS児なりに努力していることを知り、少しずつではあるがS児の友達へのかかわり方が変化していることを感じてきた。そのため、S児としっかり向き合う友達がでてきた。A児もS児が同じつき組の友達だと認めたからこそ、自分の思いをぶつけることができたと考える。

したい遊びをしている時のことである。製作コーナーから大きな声が聞こえてきた。

- S児 「たたくなや」
T児 「かんけいないやろ」
S児 「たたかんでもいいやろ」
T児 「うるさい」

そう言うとなすぐに、T児はS児をたたいた。最初は我慢していたS児だったが、何度かたたかれるうちに腹を立ててT児をたたき返した。そこから二人のたたき合いが始まった。

力でかなわないS児は目の前にあったマジックを手に持ち、T児に向かって行った。

R児は「やめろ」と、二人の間に入り声をあげた。S児の手に持っていたマジックがR児の顔に当たった。R児は「痛い」と言いながらも、S児を抱えるように間に入った。

N児は「やめろや」と、T児を止めに入った。

F児は「けんかはやめて」と、二人に声をかけた。

3人のかかわりでたたき合いは終わったが、その後すぐT児はふくれっ面で保育室を飛び出して行った。S児は、目に涙をためてその場にたっていた。

N児はどうしたものかという表情でT児とS児の姿を見ていた。

- R児 「T児が悪いんや。先に手をだしたんや」
F児 「でもT児ちゃんもたたかれたよ」
R児 「そんなもん、先に手出したら負けや」

その後、R児は製作の続きを始めた。F児、N児はT児を気にしながらも、したい遊びの続きを始めた。S児は「俺、たたいてないのに、T児からたたいてきたんや。痛かったんや」と教師に話した後、R児と一緒に製作の続きを始めた。

3学期になってから、男児を中心にコマ回しに挑戦し始めた。そんな中、N児がコマをなくしてしまった。コマが転がっていきそうなところを探してみたが、見つけることができずにいた。この日、V児が偶然N児のコマを見つけ、T児と一緒に製作コーナーにいたN児に届けに行った。N児がコマを受け取ると隣にいたT児がふざけてN児の頭をたたいた。たたかれたN児は突然のことでびっくりしたようだった。その様子を見て、S児がT児にたたくのは良くないといったことが始まりでトラブルがおきた。

○S児と周りの幼児の育ち

3学期に入り、S児は自分から訳もなく友達に手を挙げる事が少なくなってきた。たたくことはよくない。だから友達をたたいてはいけないという気持ちがS児の中に育ち、自分から手を挙げないように努力してきた。今も自分の思い通りにならないと、大きな声で友達に向かっていったり、強引に引っ張っていったりする姿は見られるが、周りの友達に対するかかわり方はこれまでとは異なってきた。相手の気持ちを尋ねる、相手の思いを受け入れようとする、ダメだと言われたことはあきらめるなど、相手と自分の関係の中で教師が仲立ちしなくても、折り合いをつけることができるようになってきたと感じる。この事例でも、自分から手を挙げないように、我慢する姿が見られた。「友達と一緒に楽しく過ごしたい」という気持ちが、S児の育ちを支えている。

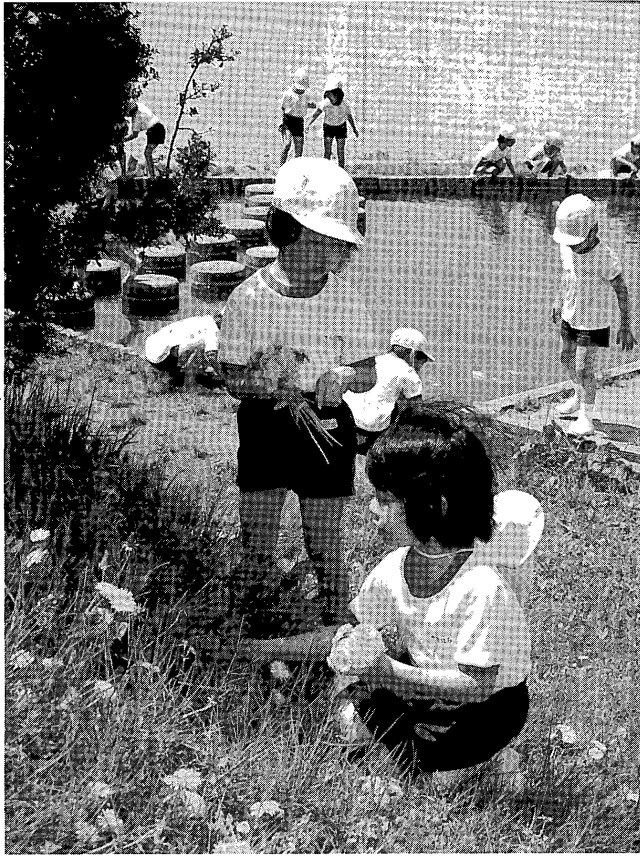
また、N児、F児など周りの友達がS児に対等にかかわっていくことができるようになったと感じる。生活の様々な場面でS児に向き合おうとする幼児が多くなってきた。冷静にトラブルの状況を見届ける周りの幼児、S児に悪いことは悪いといえる幼児、このような周りの幼児の育ちが、S児の育ちを支えてきた。一方、S児が自分をさらけ出し、S児なりに精一杯努力してきたことは、周りの友達の気持ちを変化させてきた。S児の姿はつき組の幼児らの育ちに大きな影響をもたらしたと考える。



○OT児の育ち

この事例の一週間前にも、S児とT児のトラブルがあった。その時もT児がS児に向かって行ったことが元でトラブルが起きた。T児は、コマをまわすことができるS児をうらやましいと思っていた。コマをまわすことができない自分を隠そうとしたり、できない事実をごまかそうとしたりする気持ちをS児という存在に当たっているようにも感じるトラブルであった。この事例でも、コマが発端となった。保育室を飛び出していったT児に、どうしてトラブルになったのか聞いてみたが、答えることができなかった。N児をはじめ、これまで一緒に過ごしてきた友達がみんなコマを回せるようになったことに対しての嫉妬など、T児の中には言葉で表現できないもやもやした気持ちが存在していることがわかった。

S児とは逆にT児は自分自身でそれほど努力することなく周りの友達にまぎれ、自分ができなくても、できたつもりになって過ぎてきてしまったのだと反省させられた。集団の中では、周りの幼児の力をかりて大きな力を発揮することができる。また、力があるように見える。しかしT児の姿から、S児と同じように援助を必要としている幼児がいることがわかった。一人一人が自分の感情をコントロールするための手助け、出来ない自分の姿を認めることができるような環境、できないことをできるように頑張ることができる援助など、一人一人に必要なかかわりを考えていかなければならないと改めて考えさせられた。



一年を振り返って

【S児への願い、アプローチ】

すぐに友達に手を出すことはいけな
こと、友達が嫌だと思っ
ていいことを伝えてきた。その時
その時は伝わっていいように思
う。しかし、毎日同じようなト
ラブルが繰り返されてい
た。S児に対して、どのよう
にかかわっていいかは良いの
かわからず悩んでいた。

専門家の指導

S児の抱える問題を知る

専門家の目で、S児の育ちを見る
自分できないことがたくさんあ
る。できないことに出会ったとき、
できない自分を隠したり、ごまかし
たりする為に、友達に向かっ
たり、その場から離れてい
たり、また、自分を守る為にごまかし
たり、友達を威嚇するよう
に大きな声を出したり、た
だいたいしている。半面、行動が活
発で言葉も豊富なため、周
りの大人は気が付きにくい。
(75ページ参照)

・乱暴な行為を抑える
・他の幼児との折り合いのつ
け方を見つけ、知らせる
(67ページ事例1)

担 任

絆づくり

保 護 者

チーム保育

5歳児として、本人のブライドを守りながら集
団の中で本人が生活していくための方法を
探る。

・S児の行動を観察して、本人の折り合いのつ
け方を探る
・暴力的行為を抑える

(気づき)

専門家のS児の見方を学ばずして他の幼児
への見方も変化してきた。毎日の生活
の中で、できないことにかかわろうとし
ない、自信のない自分を隠そうとする、こ
のような幼児が何人もいて、それがわか
った。一人一人の姿をしっかりと見てい
く大切さを改めて感じた。

《S児の思い、行為》

・大きな声を出して友
達を威嚇する
・たたく
・ほしいものはすべて自
分の物にしようとする

《集団の思い、行為》

ト ラ ブ ル

・怖い
・かわりたくない
・何もいえない
クラスの中には、S児の楽しさ、おもしろ
さに興味をもち、自分からかかわって
いる幼児もいる。また、これまでかかわ
り、ある幼児は、教師に対して「何でS児
ばかり怒るの？」と、S児をかばう幼児も
いる。

＜一学期＞

R児

S児が集団とかかわる時、R児の存在が大き
かった。友達の思いを受け入れて一緒に活
動する時、自分の弱さを認め友達と向
き合おうとする時、R児に支えられてい
た。R児という支え合い、認め合っている
友達の存在がS児の育ちを支えた。
(70ページ事例2、72ページ事例3参照)

＜二学期＞

A児

R児以外の友達の言葉を
受け入れるようになった。

友達や教師の力をかりて、少しづつでは
あるが、自分の気持ちをS児に伝える幼
児の姿が見られるようになってきた。

友達がS児に対して自分の思いをぶつけ
る事ができるようになった。(72ページ事
例3)。

＜三学期＞

ト ラ ブ ル
(74ページ
事例4より)

自己コントロール
への足がかり

(S児の育ち)
・自分なりに状況を判断し、
その中で自分の感情をコ
ントロールしながら友達と
かわろうとする
・友達に手を出さないよう
に我慢する
・やってしまったこと、自分
が悪かったと思ったことを
素直に認める

S児の変化を感じ、S
児を支える友達ができ
てきた。

(集団の育ち)
・公平に状況を判断し
かわり合うこと
・自分の思いを自分の言葉
で表現することができ
る

【集団への願い、アプローチ】

・嫌なことは嫌といえるよ
うになってほしい
・S児のいいところはいい
ないと伝えられるよ
うになってほしい

集団の中でのS児の
あり方をさぐる

S児に同等にかかわることができ
るようになってほしい、また、公平に
状況や友達を見ることができるよう
になってほしいと願ってきた。そのため、
教師は周りの友達がS児に自分の思い
を伝えることができるように、みんな
のことを守っていることを伝えたり、
伝えることができる雰囲気をつく
りしていく。(67ページ事例1参照)

集団活動の中で、S児と周りの幼
児と一緒に活動する経験、みんな
で一つのものをつくる経験を支え
てきた。(70ページ事例2)。

(気づき)

一つの集団の中、一人一人の育ち
はバラバラである。しかし、一つの集
団として育ち合うことができる関係性
が大切である。友達を受け入れる、信
頼する、認め合う、支え合う、このよ
うな関係をつくるにつれて教師のか
かわりが必要になる。自分と友達の姿
を見つめられる5歳児だからこそ、集
団の中で育ち合うかかわりを考えて
いきたい。